

ダンス授業における創作活動が
ジェネリック・スキルに及ぼす効果
—チームワーク能力に着目して—

谷本英彰

The effect of creative activity to generic skills in dance lesson
—Focus on the teamwork competency—

TANIMOTO Hideaki

Abstract

The purpose of this study was to examine the effect of creative activity in dance classes, as a form of active learning, on interpersonal relationships and the generic skill of teamwork competency. The research subjects were 49 male first-year university students in dance classes that focused on creative activities, carried out as follows: once a task was assigned and understood, groups were formed, and each group held discussion and created a dance. Each group then performed their dance for their classmates, and watched the dances created by the other groups. New groups were formed each time a new activity was assigned.

The result of this investigation indicates possible improvement in interpersonal relationship and communication ability, specifically encoding ability, suggesting that creative activities in dance classes assume an important role in first-year university education, because communication ability is the basis for teamwork competency. Limits and future strategies for enhancing the utility of this program are also discussed.

キーワード：ダンス，チームワーク，アクティブ・ラーニング，社会人基礎力，ジェネリック・スキル

目 的

現代社会は、情報化やグローバル化の中で産業社会から知識基盤社会へと変化し、その中で社会人として求められる能力も変化している。本田（2005）は産業社会の中では、知識の量や正確さなど標準的で客観性の高い能力が求められてきたが、現在の知識基盤社会においてはネットワーク形成力や独創性・問題解決力といった、より本質的な能力が求められるようになってきていると指摘している。後者のような現代社会において必要とされる能力は、ジェネリック・スキルと称され、現代の高等教育において大学生に身につけさせるべき能力の1つとして注目されている。

ジェネリック・スキルは国や時期により表現や用法は一樣ではなく（清水，2012；吉原，2008），我が国においても，国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）の「職業的発達にかかわる諸能力」，内閣府・人間力戦略研究会（2003）の「人間力」，厚生労働省（2004）の「就職基礎能力」，経済産業省の「社会人基礎力」（社会人基礎力に関する研究会，2006），中央教育審議会（2008）の「学士力」，中央教育審議会（2011）の「基礎的・汎用的能力」など多様な名称により示されている。それらの概要を表1に示したが，その名称だけでなく内容も多様である。しかし，これらには共通する点も多く，成田（2014）の言葉を借りれば，ジェネリック・スキルとは，グローバル化する変化の激しい社会のなかで，変化に柔軟に対応できる力であり，あらゆる職業を超えて活用できる「移転可能（Transferable）」なスキルと定義することができるだろう。このようなスキルは社会でどのような場面においても必要とされる汎用的な能力であることから，学校教育の最終段階である大学教育においてこれらのスキルを身につけさせるために教育の質的転換を図る必要性がある。

このことについて，中央教育審議会（2012）は，社会に出てからも主体的に学び続ける力を持った人材の育成のために，学士課程教育における大学授業を能動的学修（アクティブラーニング）へと転換する必要性があるとしている。アクティブラーニングとは，教員による一方的な講義形式の教育とは異なり，学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称であり，具体的には，発見学習，問題解決学習またはグループ・ディスカッション，ディベート，グループ・ワークなどの学習活動がそれにあたる。

本研究で取り扱うダンス領域は，2012年度から中学校1・2年生においてダンス授業が必修化されているが，ダンス授業は他の運動領域とは異なり，「心身の解放」「身体による豊かなコミュニケーション」「いま・ここから創り出す問題解決学習（ゴルフフリー学習）」という特性をもつ（村田，2012）。また，柴（1992）は，小学校教員養成課程に属する大

学生を対象とした創作ダンスの授業研究を実施し、受講生の感性、観察力、思考力、創造性などダンスの創作活動に関わる諸能力が向上したことおよび自己実現としての創造性あるいは個性を生かすことに対する認識が変化したと報告している。そして、柴（1992）はこの結果を踏まえ、創作ダンスの学習は、自身の人間的価値に関わる成長や自己実現を促す学習として捉えることができると結論づけている。さらに、中学生を対象とした研究ではあるが、中村ほか（2007）は、創作ダンスと現代的なリズムのダンスの教材特性について検討しており、創作ダンスが、「動きをつくる能力」「動きの良し悪しを見分ける能力」「仲間との人間関係を築く能力」「踊る能力」を高めるのに適した教材であるとしている。したがって、ダンス授業における創作活動は、自ら主体的に課題へ迫り、仲間とともに身体によるコミュニケーションを交わしながら問題発見・解決をくり返す学習であるといえ、この創作活動自体がアクティブラーニングとして位置づけることが可能だと考えられる。また、これらの活動を通して培われる人間的成長は上述したジェネリック・スキルの獲得に寄与すると考えられ、大学教育におけるダンス授業の意義は大きいといえる。

大学教育におけるダンス授業とジェネリック・スキルの関係については、経済産業省が提唱する社会人基礎力（社会人基礎力に関する研究会，2006）の醸成という観点からダンス授業における創作活動の効果を検討する研究が近年、実施され始めている。例えば、細谷ほか（2012）は、ホールでの発表会を最終目標としてダンスの創作活動を実施した授業の受講生は、授業受講後の調査において社会人基礎力を構成する12の能力要素のうち、「創造力」「傾聴力」「課題発見力」の3要素が高まったと評価している。また、原田（2014）は学習課題が変化する度に創作ダンスのグループを再編成し、計8回の創作活動を盛り込んだ授業を展開した結果、授業受講前後で社会人基礎力の12の能力要素すべてが向上したと報告している。しかし、これらの研究で使用された社会人基礎力の指標は各研究者自身が独自に作成したものであり、信頼性および妥当性は確保されていない。

社会人基礎力は、「前に踏み出す力（アクション）」「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の3つの能力とそれらを構成する12の能力要素によって成り立っている（表1）。このうちチームで働く力は「多様な人々とともに、目標に向けて協力する力」であり、12の能力要素のうちの半数にあたる6つの能力要素で構成されていることから、社会人基礎力の中核を担っているといっても過言ではない。また、表1に示した我が国におけるジェネリック・スキルをみても、社会人基礎力以外にも学士力や基礎的汎用的能力の中にもチームワークが含まれている。さらに、社会人基礎力を除くすべてのジェネリック・スキルに「コミュニケーション」の能力要素が含まれている点も注目すべきところである。Dickinson & McIntyre（1997）は、「チーム志向性」「チーム・リー

表1 我が国で提唱させてきたジェネリック・スキルの概要

<p>職業的発達にかかわる基礎能力 (国立教育政策研究所生涯学習センター, 2002)</p> <p>将来設計能力 役者把握・調整能力 計画実行能力 情報活用能力 情報収集・探索能力 職業理解能力 意思決定能力 選択能力 課題決定能力 自他の理解能力 人間関係形成能力 コミュニケーション能力</p>	<p>人間力 (内閣府, 2003)</p> <p>基礎学力 専門的知識・ノウハウ 知的能力要素 「基礎学力」と「専門的知識・ノウハウ」を有機的に高めていく能力 論理的思考力 創造力 コミュニケーション・スキル リーダーシップ 公共心 規範意識 他者を尊重し切望課題しながらお互いを高め合う力 意欲 忍耐力 自己利他的な能力</p>	<p>就業基礎能力 (厚生労働省, 2004)</p> <p>コミュニケーション能力 意思疎通 協調性 自己表現力 責任感 職業意識 向上心・探求心 職業意識・勤務観 読み書き 基礎学力 社会人意識 ビジネスマナー 資格取得 語学関係</p>	<p>社会人基礎能力 (経済産業省, 2006)</p> <p>前に踏み出す力 (アタクメン)</p> <p>主体性 働きかけ力 実行力 課題発見力 計画力 創造力 読解力 傾聴力 柔軟性 情報把握力 規律性 ストレスコントロール力</p>	<p>学士力 (中央教育審議会, 2008)</p> <p>知識・理解 多文化・異文化に関する知識の理解 人類の文化・社会と自然に関する知識の理解 コミュニケーション・スキル 教養的スキル 情報リテラシー 論理的思考力 問題解決力 自己管理能力 チームワーク、リーダーシップ 倫理観 態度・志向性 市民としての社会的責任 生涯学習力 総合的な学習者 自らが設定した課題へ知識・技能・態度を総合的に活用する力、 その課題を解決する力</p>	<p>基礎的・汎用的能力 (中央教育審議会, 2011)</p> <p>人間の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップなど 自己の役割の理解、而して自らを自己の動機づけ、忍耐、ストレスマネジメント、主体的行動など 情報の理解・選択・処理 自身の理解・処理 自立性、課題発見・計画・実行力、評価・改善など 学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多面的な理解、将来設計など</p> <p>課題対応能力 キャリアプランニング能力</p>
--	--	---	--	---	--

ダンス授業における創作活動がジェネリック・スキルに及ぼす効果—チームワーク能力に着目して— (谷本英彰)

ダーシップ」「モニタリング」「フィードバック」「支援行動」「相互調整」および「コミュニケーション」の7つの要素で構成されているチームワークモデルを提唱しており、このうちの「コミュニケーション」については、他の6つの要素すべてに影響を与えるものとして位置づけている。つまり、コミュニケーションは、チームワーク要素の1つであるとともに根幹をなすものでもあると捉えることができる。以上のことから、我が国で提唱されているジェネリック・スキルすべてにおいてチームワークの要素は取り扱われているといえる。このことから、チームワークは我が国におけるジェネリック・スキルのひとつとして必要不可欠な能力であり、大学教育においても重要視されるべき能力であるといえる。相川ほか(2012)は、チームワーク能力を「既存の特定のチームではなく、個人がチームに属したときに発揮するチームワークについての能力」と定義し、その能力を測定する尺度として「個人のチームワーク能力」尺度を作成し、その信頼性と妥当性を実証している。つまり、この「個人のチームワーク能力」尺度を使用すれば、ジェネリック・スキル中核を担うチームワーク能力の測定が可能である。

よって本研究では、ダンス授業における創作活動が大学生のジェネリック・スキルのうち、チームワークに関連する能力を向上させることができるかどうかを相川ほか(2012)の「個人のチームワーク能力」尺度を用いて検証することを目的とした。

方 法

1. 調査対象

近畿地方の4年制私立大学に通う1年生のうち平成27年度の前期に開講された「スポーツ科学実習(ダンス1)」を受講した学生のうち調査票にもれなく記入した49名を分析対象とした。なお、本科目は2クラスに分けて授業を実施した。各クラスの受講者数は29名であった。また、本科目の受講生はすべて男子学生であり、このうちダンス経験者は1名、小学校、中学校または高等学校でのダンス授業経験のある者は8名(小学校:3名, 中学校:4名, 高等学校:1名)であった。

2. 調査方法および調査時期

調査は、平成27年4月上旬と7月下旬に実施され、授業担当教員が調査票を配布・回収した。回収率は100%であった。なお、倫理的配慮に関して、研究の目的の説明および得られたデータを集計以外に用いることはなく、プライバシーが保護されていることをフェイスシートに明記するとともに、調査実施直前に口頭で伝達を行った。また、調査への回

答は自由意志であり、いつでも回答を中止できることを口頭で伝達した。

3. 授業の概要

本科目は、学科必修科目であるとともに教職必修科目として位置づけられており、ダンスの創作方法および創作ダンスの指導法を中心とする内容で構成されている。単元計画を表2に示す。授業は、課題の設定および把握の後、グループに分かれて創作活動を行い、その後に互いの作品の発表と鑑賞という流れで進められた。創作グループは概ね5-6名で構成された。また、受講生が多くの方と触れ合う機会をつくるために創作グループは課題が変更されるたびに再編成された。

4. 調査

1) チームワーク能力および人間関係

相川ほか(2012)の作成した「個人のチームワーク能力尺度」を用いた。この尺度は、コミュニケーション尺度、チーム志向能力尺度、バックアップ能力尺度、モニタリング能力尺度およびリーダーシップ能力尺度の5つの尺度からなり、各尺度は3-4の下位尺度

表2 スポーツ科学実習(ダンス1)の単元計画

授業回数	授業内容
1	オリエンテーション「創作ダンスとは？」
2	ミラーリング：ものの動きを身体で表現する(2人組で創作)
3	リズムダンス：基本のステップの習得
4	基本のステップを使ったダンスの創作(5-6名で創作)
5	
6	日常動作をもとにしたダンスの創作(5-6名で創作)
7	フロア移動方法を意識したダンスの創作(5-6名で創作)
8	テーマに沿った即興表現(個人での創作)
9	自由テーマでのグループ創作(5-6名で創作)
10	
11	中間発表
12	作品の修正(5-6名で創作)
13	
14	最終発表
15	VTRによる作品鑑賞と評価

ダンス授業における創作活動がジェネリック・スキルに及ぼす効果—チームワーク能力に着目して— (谷本英彰)

により構成されている。具体的には、コミュニケーション能力は「解説」「記号化」「主張」、チーム志向能力は「同調」「調和」「自主」、バックアップ能力は「情緒支援」「情報支援」「手段支援」、モニタリング能力は「状況把握」「調整思考」「意見比較」、リーダーシップ能力は「遂行指導」「関係構築」「公平対応」「問題対処」より構成されている。回答カテゴリーは、コミュニケーション能力およびチーム志向能力は「1 (全くあてはまらない)」から「6 (非常に当てはまる)」、バックアップ能力、モニタリング能力およびリーダーシップ能力は「1 (全く実行できない)」から「6 (必ず実行できる)」であり、反応カテゴリーに違いがあるもののいずれも6件法であった。本研究では、この尺度を用いて授業受講前と受講後に調査を実施した。人間関係は、橋本(2009)の調査を参考に本科目を同時限に受講している者のうち「話をしたことがある人」「会えば話をする人」および「日常的に親しく話をする人」は何名いるか、それぞれの人数について調査した。

2) ダンスに対する態度

ダンスの得意・不得意およびダンスの好き・嫌いについて尋ねた。ダンスの得意・不得意については「ダンスをするのは得意ですか?」という質問項目に対して「1. 得意」「2. どちらともいえない」「3. 不得意」の3カテゴリーから回答を求めた。ダンスの好き・嫌いについては「ダンスをするのは好きですか?」という質問項目に対して「1. 好き」「2. どちらともいえない」「3. 嫌い」の3カテゴリーから回答を求めた。

3) 授業評価

本授業に対する評価について「ダンスの授業はあなたにとって有益なものでしたか?」という質問項目を設定し「1. 無益だった」から「5. 大変有益だった」の5段階評定で回答を求めた。また、「ダンスの授業を通して、自己成長することができましたか?」という質問項目に対しても同様に「1. 全然できなかった」から「5. とてもできた」の5段階評定で回答を求めた。

5. 分析

授業受講前後でチームワーク能力および人間関係の得点に差異が生じるかを検討するために、対応のあるt検定を実施した。また、ダンスに対する態度の2項目については、授業受講前後で回答比率に差異が生じるかを検討するためにMcNemarの拡張検定を実施した。

結 果

まず、「ダンスの得意・不得意」および「ダンスの好き・嫌い」について、各回答の比率に有意な差異が認められるかを確認するためにMcNemarの拡張検定を実施した（表3, 4）。分析の結果、「ダンスの好き・嫌い」において回答比率に有意な差異が認められた。そこで、「ダンスの好き・嫌い」について多重比較を行ったところ、受講前後において「好き」および「どちらともいえない」と回答した者の比率に変化がうかがえた（表3）。つまり、受講前に「どちらでもない」と回答していた者の多くが受講後には「好き」へと回答を変化させたといえる。

次に、本授業に対する授業評価について検討を行ったところ、授業の有益性については「大変有益だった」「有益だった」と本授業の有益性に対して肯定的に評価した者が全体の95.9%であった（表5）。また、授業受講による自己成長の程度については「とてもできた」「できた」と回答した者が全体の95.9%であった（表6）。

最後に、ダンス授業における創作活動がチームワーク能力を向上させるかどうかを検討するために各尺度の受講前後の得点をt検定を用いて比較した。その結果、チームワーク能力尺度における「コミュニケーション能力」において受講前から受講後にかけて有意に得点が向上した（表7）。そこで、チームワーク能力における各下位尺度の得点を算出し、

表3 ダンスの好き嫌いの変化

	受講後			χ^2 値	多重比較
	好き	どちらともいえない	嫌い		
受講前					
好き	1	2	3	12.80**	好き×どちらともいえない**
どちらともいえない	17	11	0		
嫌い	12	3	0		
n=49					**p>.01

表4 ダンスの得意・不得意の変化

	受講後			χ^2 値
	得意	どちらともいえない	不得意	
受講前				
得意	0	5	17	2.66
どちらともいえない	1	12	10	
不得意	4	0	0	
n=49				p=n.s.

表5 授業の有益性

	%	累積%
大変有益だった	53.1	53.1
有益だった	42.9	95.9
わからない	4.1	100
あまり有益ではなかった	0	100
無益だった	0	100

n=49

表6 授業受講による自己成長の程度

	%	累積%
とてもできた	51.0	51.0
できた	44.9	95.9
わからない	4.1	100
あまりできなかつた	0	100
全然できなかつた	0	100

n=49

表7 受講前後におけるチームワーク能力の変化

	受講前		受講後		t値
	M	SD	M	SD	
コミュニケーション能力	65.57	6.25	67.18	6.78	-1.86 *
チーム志向能力	54.29	5.94	54.20	6.39	.09
バックアップ能力	70.22	8.79	70.63	11.08	-.35
モニタリング能力	55.60	7.41	55.39	8.09	.20
リーダーシップ能力	68.39	9.52	68.55	11.25	-.10

n=49

*p<.05

t検定を用いて受講前後で比較したところ、記号化において受講前から受講後にかけて有意に得点が向上していた(表8)。また、人間関係についても同様に各質問項目で回答してもらった人数をt検定を用いて比較したところ、すべての項目において受講前から受講後にかけて有意に増加していた(表9)。

表8 チームワーク能力の下位尺度ごとにみた受講前後の変化

	受講前		受講後		t値
	M	SD	M	SD	
解読	30.08	4.10	29.86	3.86	0.43
記号化	23.57	4.09	25.45	4.58	-3.61 **
主張	11.92	2.64	11.88	2.96	0.10
n=49					**p<.01

表9 受講前後における人間関係の変化

	受講前		受講後		t値
	M	SD	M	SD	
話したことのある人	11.92	4.56	25.98	4.72	-17.84 ***
会えば話をする人	9.61	4.04	21.16	7.13	-10.99 ***
日常的に親しく話をする人	6.57	3.47	14.18	8.09	-6.36 ***
n=49					***p<.001

考 察

本研究では、ダンス授業における創作活動をアクティブラーニングとしてとらえ、その意義を主張すべく社会人基礎力の1要素であるチームワーク能力を指標の1つとして用い、その効果検証を行った。

まず、授業評価について分析を行ったところ、全体の95.9%が授業に有益性を感じるとともに授業を通して自身が成長したという実感を持っていることが明らかとなった。また、受講前後でダンスに対する態度に変化がみられるかを検討した結果、「ダンスの好き・嫌い」において受講前に「どちらともいえない」と回答していた者の多くが受講後には「好き」と回答を変化させていた。本研究の受講生に授業についての感想を記述させたところ、自身のダンスに対する態度の変化（例えば、『人前で踊るのが恥ずかしかったが、最後は踊るのが楽しくなった』や『自分の殻を破って人前で踊れるようになった』）または、他人と協力することの難しさや大切さへの気づき（例えば『グループ全員で協力し合わないといけないんだなと分かった』や『チームワークを作る大変さを知った。その中でも少しずつリーダーシップを発揮できたと思う。』）について記述した者が分析対象者49名のうち47名いた。ほとんどの受講生が授業を受講する中で何か壁にぶつかり、試行錯

誤しながらそれを乗り越え、自己成長感や達成感を得たと推察される。このような自己成長感や達成感が授業の価値を高めるとともにダンスに対しての好意的な態度変容も促したといえる。このことから、本研究で提供された授業プログラムは、受講生にとって意義深いものであったと考えられる。

次に、社会人基礎力の「チームで働く力（チームワーク）」の指標として、個人のチームワーク能力および人間関係について受講前後の得点を比較したところ、個人のチームワーク能力についてはコミュニケーション能力のうち記号化の得点が、人間関係については「話をしたことがある人」「会えば話をする人」および「日常的に親しく話をする人」の人数が受講前後で有意に上昇していた。これらのことから、本研究で取り扱ったダンス授業の受講生は、授業を通して人的ネットワークを広げるとともに、そこで知り合った人々との交流をダンスの創作活動を通して実施することによりコミュニケーション能力のうち記号化に関する能力を向上させた可能性が示唆された。コミュニケーション能力における記号化とは、自身の伝えたいことを相手へ伝えるために表情、声、ジェスチャーなどを使って適切に表現することである。本研究で提供された授業プログラムは、そのほとんどを創作活動にあてていた。受講生はダンス作品を創作するためにグループ内で話し合いなどを実施していくわけだが、ダンスの授業という特性上、ダンス作品の振り付けや構成について身振り手振りをういて話し合い活動を行うことが多くなると推察される。つまり、ダンスの創作活動の際、受講生は身振り手振りといった身体言語を用いてグループ内のメンバーへ自身の考えを伝えようとしたため、記号化に関する能力が向上したといえる。

以上のように、本研究ではダンス授業における創作活動がチームワーク能力のうちコミュニケーション能力の一部に寄与する可能性があることが明らかとなった。Dickinson & McIntyre (1997) が提唱したチームワークモデルは「チーム志向性」「チーム・リーダーシップ」「モニタリング」「フィードバック」「支援行動」「相互調整」および「コミュニケーション」の7つの要素で構成されているが、このうちの「コミュニケーション」については、他の6つの要素すべてに影響を与えるとしている。また相川ほか (2012) は、Dickinson & McIntyre (1997) のモデルにならい、個人のチームワーク能力尺度を用いて構造方程式モデリングによるモデル検証を行った結果、コミュニケーション能力がその他のチームワーク能力を下支えする構造となることを明らかにしている。以上のことから、本研究で用いたダンスの創作活動はチームワーク能力向上のための基盤を形成する内容であったといえよう。例えば、大学教育において在籍する4年間のうちに社会人基礎力の獲得を狙うのであれば、初年次生を対象とした本研究で得られた知見は、ダンス授業の創作活動が大学の初年次教育の一環として十分な役割を果たしているといえるのではないだろう

うか。つまり、ダンス授業の創作活動によって初年次生の人的ネットワークを広げ、チームワーク能力の基盤となるコミュニケーション能力を向上させることができれば、それ以降の大学教育においてチームワーク能力を向上させるための素地は形成されたこととなる。また、大坊（2006）は、社会的スキルと称される、対人関係を円滑に運営する適応能力の向上を目指す社会的スキル・トレーニングの開発にあたっては、社会的スキルの基礎となるコミュニケーション・スキルのうち記号化と解読の向上を最重要課題として据えるべきであると主張している。このことから、本研究で得られた知見は、チームワーク能力の向上のみならず、社会的スキルの向上にも寄与する可能性があるといえる。しかし、本研究では統制群を設定していないため、これらの知見は実証されたとは言い難い。また、本研究で提供された授業プログラムではチームワーク能力のうち、ごく一部を向上させるに留まった。これらのことから、今後は、チームワーク能力をさらに向上させることのできるよう授業プログラムを見直すとともに統制群を設定して実証的に検証をすすめていく必要がある。

文 献

相川充・高本真寛・杉森伸吉・古屋真（2012）個人のチームワーク能力を測定する尺度の開発と妥当性の検討。社会心理学研究, 27 (3) : 139-150.

中央教育審議会大学分科会（2008）学士課程教育の構築に向けて。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm（2015年10月23日閲覧）

中央教育審議会（2011）今後の学校におけるキャリア教育・就業教育の在り方について（答申）。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm（2015年7月22日閲覧）

中央教育審議会（2012）新たな未来を気づくための大学教育の質的変換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm（2015年7月22日閲覧）

大坊郁夫・横山ひとみ・磯友輝子・谷口淳一（2010）社会的スキル・トレーニングにおける対人関係解読—DESIREJの作成に向けて—。電子情報通信学会技術研究報告。HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎, 110 (33) : 85-90.

大坊郁夫（2006）社会的スキル・トレーニングに生かされる言語・非言語コミュニケーションの働き。電子情報通信学会技術研究報告。HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎, 106(219) :

ダンス授業における創作活動がジェネリック・スキルに及ぼす効果—チームワーク能力に着目して— (谷本英彰)

31-36.

Dickinson, T. L. & McIntyre, R. M. (1997) A conceptual framework for teamwork measurement. Brannick, M. T., Salas, E. & Prince, C.(Eds.) Team performance assessment and measurement: Theory, methods, and applications. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 19-43

原田純子 (2014) 創作ダンスの学習において培われる能力の特性について—社会人基礎力を手掛かりとして—. 身体運動文化論攷, 13 : 127-144.

橋本公雄 (2009) 「健康・スポーツ科学演習」の授業で人間関係は醸成できるか?. 大学体育学, 6 : 23-31.

本田由紀 (2005) 多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで. NTT出版, 東京

厚生労働省 (2004) 「若年者の就職能力に関する実態調査」結果.

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/01/dl/h0129-3a.pdf> (2015年10月23日閲覧)

村田芳子 (2012) 必修化をチャンスに, 今こそ面白いダンス授業を!. 体育科教育, 60 (2) : 9

内閣府・人間力戦略研究会 (2003) 人間力戦略研究会報告書 若者に夢と目標を抱かせ, 意欲を高める～信頼と連携の社会システム～.

http://www5.cao.go.jp/keizai/2004/ningenryoku_0410houkoku.pdf (2015年10月23日閲覧)

中村恭子・浦井孝夫 (2007) 学習成果から見たダンスの教材特性の検討—生徒の学習評価の観点から—. 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 11 : 10-20.

成田秀夫 (2014) エビデンスに基づいた大学教育の再構築に向けて—ジェネリックスキルを含めた学習成果の多元的評価—. 情報知識学会誌, 24 (4) : 393-403.

清水禎文 (2012) ジェネリック・スキル論の展開とその政策的背景. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 61 (1) : 275-287.

社会人基礎力に関する研究会 (2006) 社会人基礎力に関する研究会—「中間取りまとめ」—. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf> (2015年7月22日閲覧)

柴眞理子 (1992) 創作ダンスの学習と自己実現. 人体科学, 1 (1) : 79-88.

細谷洋子・田村典子 (2012) 創作ダンス授業における社会人基礎力育成についての—考察—問題解決学習の課題に着目して—. 四国大学紀要, (A) 37 : 77-90.

高木幸子 (2005) コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割. 早稲田大学大学院文学研究科紀要, 第1分冊, 哲学 東洋哲学 心理学 社会学 教育学, 51 : 25-36.

吉原恵子 (2007) 大学教育とジェネリックスキルの獲得: ジェネリックスキルをめぐる各国の動向と課題. 兵庫大学論集, 12 : 163-178.